

ジャパンサーチ戦略方針 2021-2025 に関する連携機関との意見交換会（概要）

令和3年9月22日に策定・公開された「ジャパンサーチ戦略方針 2021-2025」¹を基に、デジタルアーカイブの取組の課題・展望等を連携機関で共有するとともに、連携機関から寄せられた意見をジャパンサーチ戦略方針のアクションプラン策定の参考とするため、連携機関を対象に次のとおり意見交換会を実施したので、報告する。

1 日時及び場所

令和3年12月15日（水）14:00～16:00

Webex Meetings によるオンライン会議

2 参加者

ジャパンサーチと連携する 22 機関 25 名

3 内容

意見交換会は二部構成で実施した。

○第一部

戦略方針が5年後の目標として掲げる「デジタルアーカイブが日常に溶け込んだ世界」について、連携機関から参加した7名のパネリストによるディスカッションを行い、MURAL（オンラインホワイトボード）を用いながらイメージを共有した。

■5年後に実現してほしい「デジタルアーカイブが日常に溶け込んだ世界」とはどのような世界だと思いますか。

- ・多くの方が「デジタルアーカイブ」という言葉を知らずにデジタルアーカイブを使っている。
- ・アーカイブ機関が肩ひじ張らずに、知らないうちにデジタルアーカイブが使われるようになるとよい。
- ・文化財のデジタルアーカイブではなく、デジタルアーカイブの一領域に文化財世界が存在している世界。様々な事象がデジタルアーカイブされている。
- ・ビジネスとしてまわっていくことも重要。文化機関でも情報連携の重要性が広く認識され、ビジネス関係（一般企業）の人もジャパンサーチに参加するきっかけができればよい。お金も含めてアーカイブの仕組みが回っていくことが持続可能性を担保する上で大切。
- ・「デジタルアーカイブ」という映画（配信動画）が大ヒット！映画の中でもデジタルアーカイブが実際の舞台になるようになると面白い。映画はビジネスの典型。「ビジネスとしてまわっていくことも重要」につながる。「仮面ライダーデジタルアーカイブ！日常と成長」を5年後に作れたらよい。
- ・コミュニケーションや情報インフラの役割が一番大きい。演劇というメディアに対するファンのすそ野を広げ、創作活動のベースになるような機能が提供されることが重要。コミュニケーションとしての機能であれば5年という短期間でも可能ではないか。

¹ <https://jpsearch.go.jp/about/strategy2021-2025>

- ・ビジネスの中でデジタルアーカイブが使われていけば、みんなの生活の中にデジタルアーカイブが入ってくる。
- ・「日常」といったときにプレーヤーは複数いて、ビジネスと結びついているケースが多い。たくさんのプレーヤーを招き入れる意味でもビジネスの観点が重要。たくさんの人の普通の暮らしの中に入るために考えなくては。
- ・情報が欲しいと思ったら、インターネットから容易に「適切な」画像や情報が入手できる。
- ・いろいろな情報があふれる中で、ユーザが取捨選択するスキルを身につける必要が出てくる。そうしたリテラシーが当たり前になるようになる世界になるのではないか。
- ・情報を得たいと思ったときに、信頼性のあるサイト・機関から情報を得ることが習慣づいている世界。
- ・デジタルアーカイブのコンテンツ自体が流通する。展示物になる。
- ・様々なプラットフォーム（文化遺産オンライン、ジャパンサーチ、文化庁アートプラットフォーム、Google アートアンドカルチャーなど）が相互にデータ連携してインフラになっている世界
- ・作品についての情報が常に作品に付帯するのが当たり前の世界。美術品の流通では、所蔵者が代わるたびに作品に関する情報が少しずつ失われていくことが往々にしてある。デジタルアーカイブが情報を付帯・蓄積する担保になるとよい。
- ・我々が付けた情報が付いて流通できれば、ユーザが付加価値を含めて情報を得ることができる。
- ・ミュージアムの保存・展示といった諸活動がオンライン上でもリアルと同様に取り込まれる。またはリアルにシームレスに接続することが当然のものとなっている。ミュージアムの活動のオンラインにおける再定義が確立している。
- ・デジタルアーカイブが日常に溶け込むことで、「ミュージアム＝展示会をするところ」というイメージが取り払われる世界。
- ・所蔵作品について、誰でも自由に、広くも深くも、色々な方面から自学自習し、情報を得ることができる。学びに必要な情報が専門家だけのものでない状況。
- ・学校教育もそうだが、一般的なユーザにデジタルアーカイブが使われるようになるには、入りやすいけれど入っていくと色々な関心に紐づいていくことが必要。「入口はポップで中はディープ」という構造・体制を築くことが必要。
- ・小中高の日々の授業で、当たり前のようにデジタルアーカイブが使われる世界。GIGA スクール構想が展開し、デジタルコンテンツをいかに活用するかが喫緊の課題。子どもたちが豊かで深い学びを築くためには教科書以外の教材が必要だが、学校現場とアーカイブ機関とのコラボが十分でない。両者の境界が溶けていき、協働的に教材の開発に取り組めるとよい。
- ・小さい時からデジタルアーカイブを使うトレーニングができていると、「デジタルアーカイブ」という言葉を知らずにデジタルアーカイブを使っているという世界につながる。
- ・区民にジャパンサーチを始めとするデジタルアーカイブを紹介してもほとんど知られていない。デジタルアーカイブと日常は遠い。5年は意外に短い。生活の中にデジタルアーカイブの中に溶け込んでいるよりは、日常の中の非日常の中にデジタルアーカイブが使われるのではないか。るるぶ的デジタルアーカイブ、エンディングノートの一部にデジタルアーカイブ、昔話りのシチュエーションの中にデジタルアーカイブ、そうした位置づけを狙うのがよ

いのでは。記念日はデジタルアーカイブと。

- iPhone や携帯の写真アプリ等で写真を保存するなどはデジタルアーカイブの活用につながるように思う。
- 双方向のやりとりができる。様々なデジタルアーカイブにおいて、運用者と利用者の関係性は一方的な場合が多い。
- 学校教育においては「双方向」はとりわけ重要。ウェブ上にあると情報が一方方向になりがちで、従来の学校教育に近づきがち。子供たちの学びが資料と結びついて循環するような仕組みが必要。ジャパンサーチのワークスペースはその実現に資するツールと思う。
- 余暇に「見ること」「知ること」「調べること」を楽しむ人が増えてほしい。
- 5年前に Twitter を見る生活はしていなかったが、現在は空き時間に YouTube などを見ることがある。すきま時間に面白いコンテンツを見つけられる。次に知りたい情報を見つけられる機能が提供されると、日常生活でも使いやすいのではないか。
- 「作品についての情報が常に作品に付帯する」につながると思う。

○第二部

ブレイクアウトセッションによりグループに分かれ、ファシリテーターによる司会進行の下、「デジタルアーカイブが日常に溶け込んだ世界」の実現のために、自分たちはどんなことができると思いますか」及び「ジャパンサーチにどんなことをしてもらいたいですか」の2テーマについて意見交換を行った。

■「デジタルアーカイブが日常に溶け込んだ世界」の実現のために、自分たちはどんなことができると思いますか。

- レファレンス窓口がつながりの始めだと思う。つながりを大事にして利用者同士のコミュニケーションを。日常の者が入っていることが大事。地域資料や身近なもの・ことが入っていることが日常化の第一歩。
- デジタルアーカイブに載せる情報を充実させていく。
- 利用しやすくなるような環境づくり
- 何をデジタル化するか。内容を古いものだけでなく現代のものにも広げたい。
- ハードルを下げるためにはどうしたらよいか。YouTube を使う、図書館のお話会や授業で使う。現在は入口のハードルが高いが、使いだしたら色々なことが分かるはず。入口をどのように広げていくか。
- 啓蒙活動が重要。講習会を開く。メディアに露出していく。絶え間ない働きかけが大事。
- 楽しさという視点を忘れずに。酒のつまみとしてのデジタルアーカイブ。文化祭とコネクトしてはどうか。
- 楽しいよということを働き掛けていくべき。
- 自分たちはデジタル化を粛々と行い、オープンな形で公開していくことが大事。
- 眠っている資源を発掘し、デジタル化することで整理を進めて行く。
- 自分たちでも広報を行っていく。資料紹介をしてもらったりイベント開催したり。DA を盛り上げていく。
- 教育利用やワークショップを開催する。メタデータに先生が使いやすいキーワードが付いていることが大事。

- ・現代のデータを意識的に取り扱う機会を増やす。
- ・オープンな条件でのデジタルアーカイブの公開を進める。
- ・デジタルコンテンツの量と質を向上させる。
- ・社会におけるデジタルアーカイブの認知度を向上させる。

■ ジャパンサーチにどんなことをしてもらいたいですか。

- ・レファレンスカウンターを置いてほしい。窓口があれば一歩踏み出すだけなので聞きやすい。
- ・PR 大使や 1 日署長のようなものがあれば知名度が上がるのではないかと。国民にデジタルアーカイブを浸透させる。
- ・ジャパンサーチの統計情報、アクセスランキング、よく使われた用語等を連携機関にも共有してほしい。ジャパンサーチに参画した意味を説明しやすく、自分たちの学びにもつながる。
- ・収録作品を調べたらどこに展示されているかという情報を載せてほしい。
- ・データ提供側から見て、ジャパンサーチ連携の負担感を簡易にできる仕組みづくりができないか。
- ・「入口はポップで中身はディープ」に。活用側でポップなビジネス面での活用も含めた利用もできる。
- ・ジャパンサーチ自身が知られていない現実がある。知名度を上げていく取組が大事。NDL と連携機関のそれぞれが広報に力を入れる。
- ・アーカイブから自分がコンテンツを作るのは大変。どういうツールを使ったらよいかなど。手助けするためのスライドショーといった制作ツールや講習会、レファレンスカウンターなどがあるとよい。
- ・頑張ったことが形に残るコンテンツを開催してはどうか。
- ・ペルソナのイメージがまだできていないので、強化していくとよい。
- ・ジャパンサーチの検索方法を拡張・強化してもらうこと
- ・自分と組織のモチベーションが上がるようにデータ連携したら褒めてほしい。NDL のレファレンス協同データベースのように表彰してはどうか。頑張りの評価の仕組みがあるとよい。
- ・提供機関のコンテンツに対するアクセス解析データを提供してほしい。
- ・ジャパンサーチとの連携における工数削減のための技術コンサル的な役割
- ・デジタルアーカイブの構築アドバイザー

4 参加者からの感想

- ・異なる分野で立場の違う人の様々な意見を伺え、貴重な体験だった。
- ・連携機関同士のコミュニケーションができることは大変ありがたい。
- ・自機関が取り組んでいることを伝えることができた。
- ・少人数でクローズドであったことは意味があった。機関を代表していても個人的な意見でよいとしたことが効果的だった。